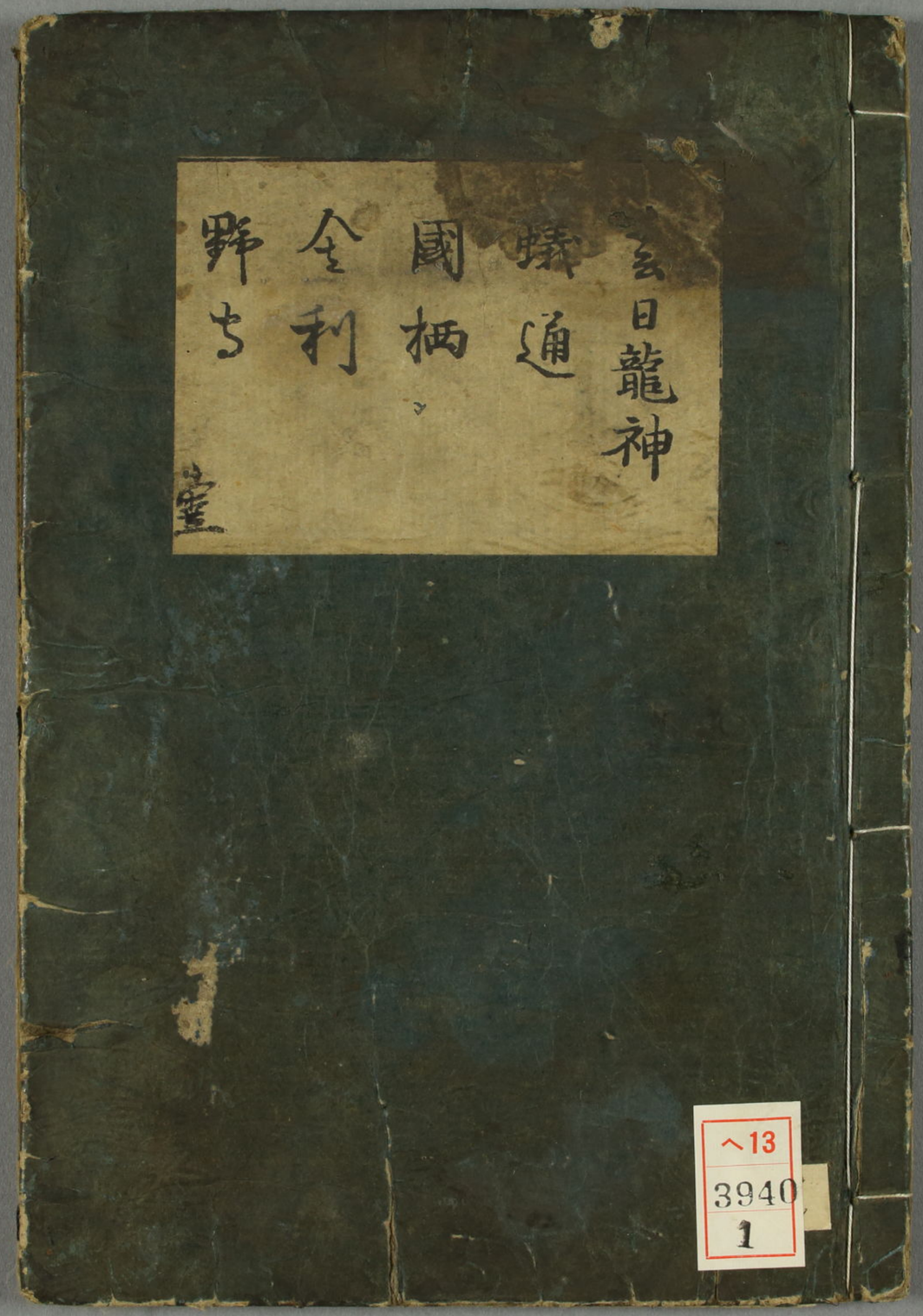

玄日龍神
蟻通
國栖
全利
野寺
へ13
3940
1

門へ13
號3940
卷1

冊號 立墨執文
函 元

本源

近江縣物語序

ひとせ近江國よりまうでゝ月ごろ小家さもちのゝしてゝ
とひらゝ人すくなうらびおりぬゝ秋毎ゝ
やうよりゝ花ゝぐゝうりたしで旅ゝ
ぬのちゝ色も例なるゝびおぼゝぬるゝ
いりきてうちかゝらいづまゝくごゝ
ゝ月ゝ花ゝのゝさゝ
いるゝもあゝぬなゝ
箱のあゝびうちゝ

くりかへしくりかへしとうちずしたるが何となく
ちづうしげなしだ。翁のいはるゝよそ。興ある
物語をいはるゝわれ。也ちゝのうまれかはりとい
だきなどしてこのさゝ〳〵光くちて侍るを
みおつる程にて侍りそのゆゑ此國乃
あがたにおちゝけるくに人来たりうけ出のと
しまつるゆゑにこそ。ちう紀はまぬ。にのうり
をもとめてちにて我。ほうへて侍りしこの
あるうやけてのちハ。あるくちまでよ。ゆゑ侍る
人も侍らぬ。さて翁のこそのあさいを為りく

ちりといふうちきくうりけりなゆうしゆ
をひくさしらうてそのをせだ。翁すくるる
くちひぐらうてものゆ雪林沈乃菩提僧
うしあるあるうしあ義どものまねびせんも
町くちいるをこゞ母〳〵れどほとぎす
さふらひくくちゆうさげてゆうんもふすう
にゆるゆもだといひつ。林ゆゆよりゆ
うちそふくくとうちをひてそもくぐ
つまゆ町出ふゆ町出しゆ聲にゆ。ゆちぶ紀ち
ゆるゆ。古代なるゆ物語うさんげ。ゆく

こうとうあるこちせんぞやぞうこう
紙ぞうでくだくものまくはけつこの
ぶ侍ぶたにぐしはいるじ第りてゆづるか
物語うきぶりあるくてよとこふこちるる
巻とくんも物うくて出ることうりいでつの
ちくついいにきくひぐめるのやまりども
おほうなんうく

六樹園

近江縣物語卷一

近江縣物語目録

第一　月夜　ふかもとう

此巻ハ義原の季光が素初冠よりてるを設けるなり。
ほうくみえうかくあれバ森送ちりに乞食の基く墓で
ほうくがちるる時甚子くぐりりを結人き盗て乞食
をかやまし子孫もうひてとり行くこと

第二　月夜　せいがいた

此巻ハ義原保浦同齋光が遍とりしおう
うり橘安世が弟子上梅九郎能いくりけるこ
ぶ婿よんといつを同中よる常人しいかの
義ぐくの英計と用ひるにうり極九亡命ちて
國くりんとまるを

第三　すのまた川

此巻ハ梅九すのまた川よ沖り久るよ盗人かりゆて
り初りしをこく遊びぬるよ盗賊の落
者感ドて引つとて屋敷へひるこをもろ

第四　草まくら

此巻ハ橋安せが妻盗賊入来て。狼藉よ及び娘蔓生
とらぐひゆくるの。盗賊のおつ。梅九と出るとあり。
郷へ出くせやくる。梅九逢申。ぬ年人の家よ沖りて。
あせが妻乃狸とたもけて。盗人が逃りをそぐ免く
もあり

第五　山のとね

此巻ハ夜叉丸とぬすび。蔓生を妻よせんとして。
蔓生がえうりいとおちつる事。梅九法師の人命とすく

此巻ハ都にのぼりゆるをもろ

第六　ひなぎ物うい山ぶく

此巻ハ常人盗賊よ降参して。山ぶちとなり。盗賊大
を勢てぶりく孤屋よ及び風呂乃湯とく事もろ

第七　いもかーら

此巻ハ光人金剛ニ命とる盗人の妻問もて和尚の家ふ。
物ぬすんとしてもうさて金たけら盗て金剛がかうこ
逃出て近ニ寺ふ安世が家よゆきて物おまく居いでしとこ
ぬしとあるをもろ

第八　袋のうた

此巻ハ盗賊乃孔ー女だをやを川まてひさ

第九　石山寺

夢ゝ的常人梅丸ともに蘭生と実ゝんとして、ゆくゑ知らずなりぬ。又梅丸暗がりにて、ゆくゑ知らずなりぬ。夜深人入りて蘭生をとられゆくゑ知らずなりぬ。

こせ〜一面へ安世丸行ひてとり返し、梅丸了覚ん

第十　田村将軍

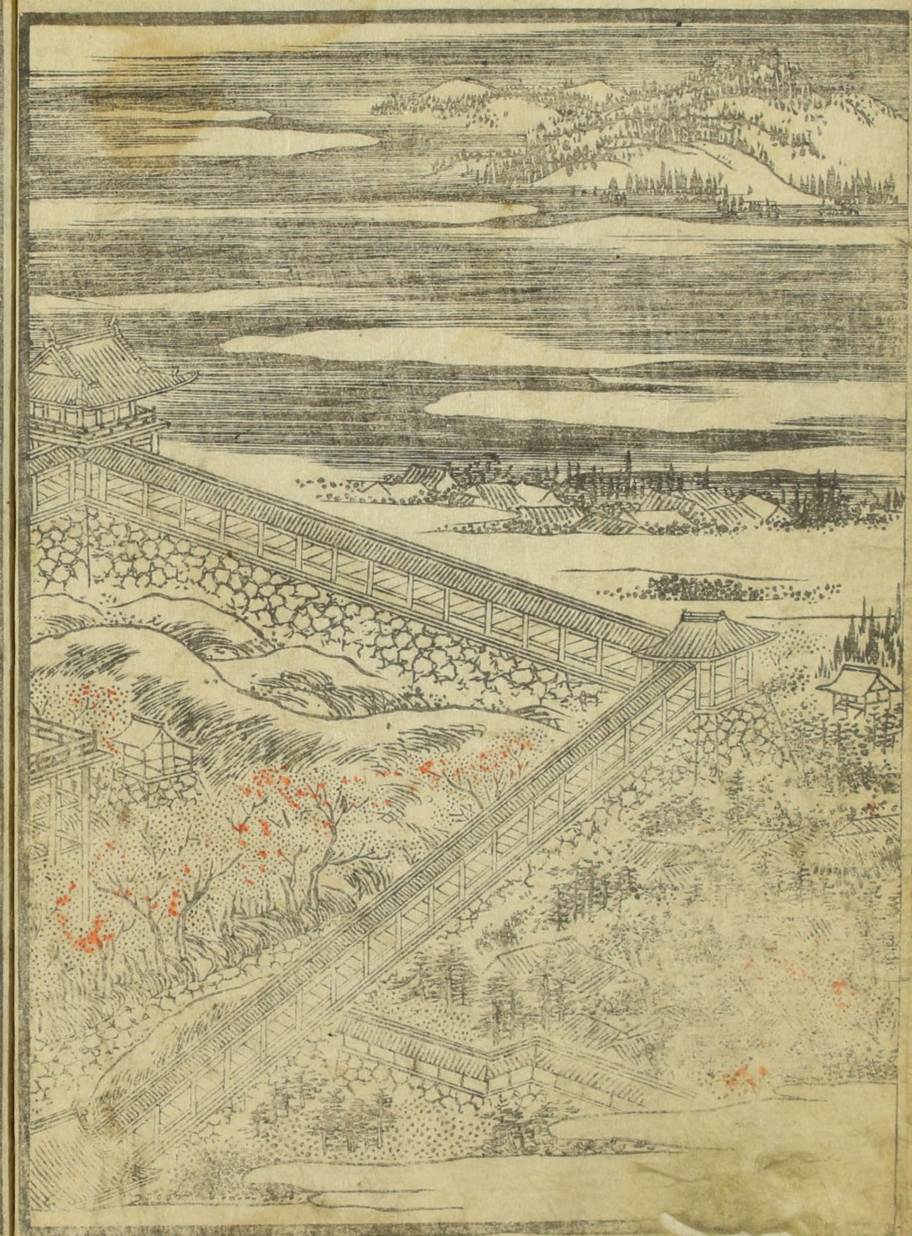
この巻は保昌・近江守ゝ齋明と云ふ人、梅丸智計乃事・梅丸常人が影ゝ現りて、田舎と舞。安世が重代

の貨とせる鎧とそり返ひる。

第十一　うどんげ

この巻は後嵯峨の御時、伊勢の国なる。待乗が陣に向ひ、此巻は後嵯峨の御時、新光乃龍なりて、父子数面の。西念賊営と戦ふる。梅丸近江守ゝ齋明、物語の師物語の。せる事

初瀬山の図



ふらくのすをう
藤原李光
我子の号
量を試
むる不

季光がゐて
船岡よ葬り
ける時を食
事りて
衣張の
ものとりゆん
とする所へ
旅人来あひ
てを食
をあやはし
ようがてり
うるのと
はなしを

近江縣物語巻之一

○ふしぎのちぎり

今ハ昔村上の御時藤原の季光といふ人有けり。白河
ほとりに家ゐをしめて住けり。兄ハ源の満仲朝臣につ
かへて、仲光とぞいひける。此季光弓馬の道にかしこく、智
勇兼備へしかバ、兄仲光にもおとらず用られ、常に子の
なき事を歎いひけるが、妻なりけれとの思ひたちして
志のびて初瀬に詣でゝおがみ祈申ける。願文御
燈などたてまつりて、仏の右の方なる局に入て、終
夜誦経して暁のころ志ばしまどろみぬ。しかれども
あまり詣で行まで、かぐやきこへけるれバ、駿馬に[illegible]

たるに、ふと法師の幼き児をかき抱き、負ひして
此みどり子を得させけり。これを育てん事かたかるべし。
養ひなんことハ安かりなん。此のさまを妻にもかたりけ
れバ、神間きまんとするほど、雲霧のたちまよひて
なむありけるに、ぬさて目さめて感涙とゞめがたく、山をくだりて
京に帰りつきぬ。日数ふるほどに、身たゞならぬ心地して
月みちて、やすらかに平生なる男子をうみけれバ
季光が悦こそかぎりなけれ。親族の限りつどひ入
来て、うちよろこびいはひかしましき迄喧しかりけり
子をめですぐれてよかりければ、愛し名つけて
のうちなる時、おもひいつくしみ育ひけり

ほどなく一年の日数ちて、若尾誕生の日なれば、
季の光うせきんより、若尾がもてあそぶ調度ハもとより
にて、筋文房の具なども、なべて若尾と申すふで
いづれとも乳しらも守りぬるに、若尾ねさうて筋を
取て去て放さず、季光うち見て、此兒高疏の雛若
うめをうけて、筋をこれをハゆゝすゑ我家乃、常へ
見ひべき兆なりとて、大きに悦ばひて、即宴席を
設てうちのげ祝ひ、若尾ハ時筋を放
さびひく人形 兆数 ふりつゞきなどハまゐ
筋と取てで遊びるうまれつまさとゝかゝとうなを
で、乳母ども、いとゞ物よろひてちゆ

其年も暮し、愛尾三とせにかゝりよろひけゞ
疱瘡を病ゝくるしゝ。新おどにハさまでもなる
もなくハれぬ。堪ぶげよゑ父母ハ
わておどろきて、醫師請ぜて、薬をこひ、療治をくハ
どさなくまもなくひろ紙ど、うひなして五日ぞうもし
く午の時ばかりなくぬりぬ。父ハあまり軍に後ぎに
こゞがさでおきれぬり。母ハかきりにひしくしく泣
ばかりうきくどおもかく家ばかりも光ひとおく
聲と呼てひとうま遠ひひり。春ハ見ぬ
らひく、因うちたまきて云ハ今ハうひなすもの
きかと守りそんいかくくよ駒ふぐつぼう行も

とく藥送の用意すべし。彼が衣服玩器の新しきを留めおくべし。重病深むれば彼がもとより歎きすれども、彼が願ふこんかぎりハ悲嘆よとさのて、暮り初せよとて、妻らもいのべよおそくんハ俄なりあすとも、といくど夫頭うちふりていな死なるものと思ひて、ちぎりもかさんよ活をくんハ鴨を断つべひを絶バ、くも出したてよといふ。京のをさなご時さのごく用意して、その日乃暮るを、舟岡のあるよ舟ゆたくづか墓けるを世の中をなにくたくんと順あるんの讀うりしもかる時ふるとといひく父母きたりあり親族乃人ぐるかひと所よりぬて顔よおほひうる神引

ちる人ざこなしちりあてもも初瀧の観音乃夢よさく入りしてなどてかくぶ命みぶれりのと授ませるひけるにふ謀こそ育んとかうくべしとのうまひしハ。ひうくうしめ死せなんこを告ひつるあれさるもえず日をこしるをさかちよとて母ハうしくんもく。泣まどひく絶入る事度々なり父も今ハ人ハ泣ちりせんもこのうしにくをくして心やすれ山里ハかれもりてんなどりのおかるうきくくさるくにいまんこうくれどやくんそれ悲しちの思ひのやあさりぬるぶよりかきんの聞とハあくを世ハ此舟岡山といふハ七人を生き葬る所あり。

ちびちく物すごくなりにたり。屋ごとに人げもなきを。怪しみて夜に入てハゆきくするものとなし。何ともなき。本堂乃霧うへ。ごと所よハ仏ぞうなりにたり。あぶらき松の風ハ。壁寺乃鐘よひぐきをつくるふ。天狗ちくとなどいふハ。拙もかくあるよ。こころえ。ゆるべうれしいとく物かろしくぐ。ゆるさうひなりぬ。霄やうれをぐきに。垢つき。破まるる。衣ゑ。遠まとしいまるる。食の。鍬うちくげ。ぬさうてそちくあんいはつ。けい。書光ゑ。墓ゑ。墓ゑ。塚乃もとに。まりて。鍬とりてうがちほるどかくちて。掘のぞきて。おりにたるけあ。棺乃。蓋をひくき。衣服調度かどらり。出して。

白ちくなりて。持ゆきんとせしが。どうるのの死骸乃腐り。何やらん。物の見ゆるべさ。霧さこそ。たちまちてびきぬうんとするに。世よハおもそ。白華法当しぬ。ちやつ。魅ちくこそうちゐ。絶してらせんずとて。鍬ふりあげて立かりるにいふふ。うさちくなる石よつまはたくのけさ。ちびたるこハくちをとてふうびたるぬ。起あがらんとする。暗たりうれ。松ちくしてくる人あり。えんはけくなかばかりあんとして。高ちひよちして。森乃中に入ゆ。伺ひをるよ。旅人とうんちく。菅笠きて。太刀横さ

脛高くかげるる男の杖ありつゝきるゞ色のすて
あるをとゝて驚く頭うちかゝもけゝ立のするほど
此兒起きりに泣しかしれど又こゑもて驚て杖てゝ
あて塚穴を覗えゝやがて目さしのべて兒を
抱きこうりるにいよゝ泣ども紙ばかりひゝ
ふゝゝゝよかしてゝゝつかねハいうるするふりしおう
らめもせぬまりをれバ興旅人がの色や青ゝ
おひて立あがるにかるぬちよなりてゝ表をちり
出て色ゝ変てとうけゝびきれば旅人ハのゝぶ
出りぬぎ時あよ持る杖をさげもてられば火きゝ
あ。ゆやめ見へゝ旅人ぬすびとごゝんやしとゝ

起あがりれどゝくてゝ
なゝ敷膚をあるべよぬゝ
みて投んとも旅人とゝ
色食いうりゞにたゝ
うりしして樹の根ますゝ置くさぐりよりあ。
ゝあとゝんとゝ色食ハゝびる所よ鍬
有るを見て兒がかゝあゝをめあてゝ樹ある方り
り茅ゝ旅人の呼しおりふあうりをゝとゝ
ゆりに高くふりあげて打るとゝ紙四ゝよ
もあゝゝゝゝゝに樹の庁枝を裂をりつ旅
人此青を問うりゝえゝりやあゝとゝゝびてゝ

をのべて。毛食が腰のいつゝに。右のゐに。えりをとゝく
てゝいかりを投られば。ふゝ〳〵しゐて。彼の塚穴のゆへ
おちいりぬがごとゐハ。なをえ〳〵。くゝとゝりて。起あが
るべ〳〵もなくして。旅人ハ。うめともあゝず。又ゆの見
をふとゝろよかしいれ。色脊よ負て。大勢よ云りるハ。
ちゝ〳〵つぎゝをやつげなどゝきゝ〳〵ろひ。爭ちんゝゝ。
おのゝ〳〵よまゝ〳〵べきゝハ。無慙のぬすびとやつゝとお
ぢりゝ〳〵いて。喘いる兒の脊うちたゝきはゝ。
がごせ〳〵といひ〳〵てのどにあゆゝてを色ゆき
けゝ毛食ハ。塚穴よ投いれられて。榎の角にて。擲を
おちゝ〳〵ゝ。ゝゝ。絶入るゝ。やゝ〳〵人ちつゝて。

穴をとひ出ゝ見るに。有しゝ色もなゝ。兒も旅人も。
いけちりよんゝぬゝゝんびゝ。ちるにてもかやつ。腸刀をバいそ
投ぶりゝんぬゝゝんよハまゝつゝよそぜられかいこの
なれバ。方のゝき事。我身のごゝがさゝたゝりし。
世よハあゝゝしき者ゝて。ゝりゝれと。言をふるひ
ゝゝ。投あゝゝたる物りそであるしゝゝさゝりゝ
ゝど。竹にし。ゝゝ。弓。弾。又ハ紙あて。作りたる。
戯人。形など。榎の庵よのこりする乃ゝあて。錢よ
かゝへべき物もなゝれバ。ゝゝらゝて立あゝんとする
ゝ。擲をとゝゝゝゝちをゝゝる。バ。色のゝる事。うれ
をび。兒がなのしだの二のゝ。ゝりるを。九右のゐゝり

持て、おさりだひよりひて、おのがすまうを、ひらけてを、ひ
らく、そもそも旅人いうる者あて、おくあるき所よ、まを
あひて、兒をさすけらくよう、又此兒がゆくすえい
まあひいちぬるんおやへさもちくくらきゆゑあるを、
ちぐりらんとあるだのどうに、すぎくの巻をひらきて、
はゑじりすへうし

○せいづいを

さても其後花山院の御代よわりて、藤原の保輔
といふ者ありけり、左京大夫致忠の四男にて、保昌あ
そんの弟なりけるに、又右兵衛尉齊明といふ者あり、是ハ
保昌のうんの兄齊光がこなみてを有りける両人ちうう

つようきのものにて、様々悪事をほしいままにして、
人を殺し、賊を奪ふ事、常ならねば保昌
のうん天祿の初めより、公家へ奏聞を待て、両人とも
勘當ありて、追やらるゝ事ありけり、あ人かくひ
あらせて、盗賊の大將にして、数多の賊をもちゐ、
都鄙をいたび、白昼あるもおそれず、入て人の物を奪
ひ、後くハ勢つきて、五六百騎引つれ、甲冑を着う
矢鉾なども、携へて、あゆゆつよるさ夜ちおどろ武將の
追討使蒙りて、うをほくおたちまつる美女
いの賊名國くにおしつけり、国司を追出し
物をおしとり、民家より美女を奪ひ、あるハ寺社を

ちゝひやすごらして粮藉いつゝ討ちく振廻されバ弓あらう
官兵をはらハし是と責めへども、たゞ〳〵あきれ
ゐて賊徒の為よ兵器を奪れ、あらぐるよ放て
逃げる者のゝそ多うりけるさ保輔ぶあぶ名を待ぶ
びてゝらはの人いく仰あそ〳〵しるとを一日保輔ぬて
人らと集ち、酒宴ちていひるに八今ハこゝろ安し味方
かく大軍に成ぬれバ、斎明と調じあなせ不日よ都よ奏
いりちん但我軍中兵粮多うゝび没等兵を富ま
良策ありやといへば調伏九とりゝ者遣しゆゝ
ひいるゝごハかゝこきゝあゝ設でらそゆゝ古語よ三軍
いまゞ動ゝざれど糧草まづ行とやてゆゝハ餉を

あゝけゆ事一の軍謀にて我我ともゞゝそも盗賊
乃名をとり、凶残をゝ賊をゞやうゝ形くハ姑息の愛
婦人のにおゞ顧やべきやゝゝし調伏九ゞ存知よハ軍
勢ぬ至ゝゝろ豪民の家にお入り財寶牛馬ある
限り奪ひとりるんゝハ糧よ変剛し作まゞくや
しいへば妻裏九とりるゞいゝ道のゆくてに富りる
やつゞゝゞ家の物らんとハゝとゞりの覚悟あてゆゝ某
ゞ存ゆハ逃まゞゝ女ゞゝ老少をいをゞゝ引ゝ連て僕し
なゝ陣中につるゞ金高ぬを山して身のあらを
出ゝゆ者よハ返ゝつゝハすべく舩ゝゝせゆたゞ親ゝ
離ゝゝるよ別ゝゆ者ゞも財を惜まゞ特来りてゞ贖へ

こりて帰りいちんずにちくんにハ陣中の人〻居ながら過ぐるの財をえいあるべしやといくさ袴ばかりを
あつめてなをれいしくもやさんつるるか兵討殺ん
かなしひより昨日までハうほうき女ばらをのゝ奪ひ
て各よりつちのうへ〻園の伽としなさせけれど今日
ハ光サ美悪のきこえひかくいけどりて寧方に
繋ぎおくべしとて其旨三軍に觸ふぐせ身價ハ
隨ひて生捕の賞あるべしといひつれば諸勢
こぞりてたやすくこれを女ばらの二十人三十人が
めうとハ干潟の貝を拾ふやうにやすやすとめんぐ
置〻過ぐるの賞ハ数ん〻でいきみ合ちびろり。

其頃袴ばかりを伊勢国鈴鹿山より籠りのりるが程近
国を悩まし財宝を集むべしとて徳ふうち
て近くにつゝしり見バ伊勢戸張美濃近江の百姓
等あそれまぐひ〻男ハ田うくるを止め女ハ織ま
業をすてゝひたすらとて関を守りとりけれ
ども近江国神崎郡神崎の里より橋安世といふ
人あり祖父ハ此国の守をしてけりけるが世くあり
ぬ世ハうくとやりてかく田舎よりこすりて世〻盛師と
すべていとあるべきあり前生しなばらむ世ハ一人
うちうち顔うつくしく姿こそやうにて絲竹乃
道ハたしなすり歌の名さへいとうるはしくぞ

うりられバ父母にうれ物をゝうひてゆくてゝやーなひ
きるゝ安世が甥ゝ常人といふ者あり父母もなくして
乳母が家ゝにかりうるを憐ゝ思ひて引れて養ひ
けり常人うまれつきんひがゝまがゝしきのみゝ
ゝ能の方も無骨なりうれバ安世心のうちゝ
いとぐわんしたのゝかゝやりひめうりうり安世博識か
ゝるゝ兵術ゝも達しなりうるとバ遠人のゝ
ども弟子とし成て学問するも有又剣術ゝ馬の乗
なしゝ学ぶ者も多うりうり此数あり第一の中ゝ坂
上の梅九といふ者ありけるゝ年八十ゝ計にて面きよく
安らかやびうるゝ学ぶゝえの方も人ゝ多ゝうまさうて居ける

うりけるバ誰ゝ問ゝ安世もは人ゝ
ゝ我業を継べき物なれとゝ思ひられバ経文の道く
ゝ歴史百家の書ゝ至るまで發明せる
説ゝもとゝ〳〵く傳ゝ〳〵へるゝ〳〵ゝ〳〵
若者なしバ一を聞て十をしらり知て今ハ九石なる言
生ゝ成ゝ学ぶ同のひまゝにハらひき太刀うちの
つゝざとも習ひていさゝをとゝ〳〵びゝ学ぶ梅九が
父ハ世間ゝ〳〵しなりうるゝ田畑の上ゝ住て坂上の梅九し
ゝしゝ者なり梅九ゝとさゝるゝ世ハおのゝ業わしゝ田畑
ゝ耕ゝとゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ梅九ゝ〳〵ゝ父の積
九病ゝ〳〵ゝ為せぬゝ〳〵の田畑も持ゝ〳〵れゝゝ

けるが田作るべきちからもなく、せんうさるげうそんりるを
安世さのりく、ちあつうひておのれが方よりふかへく
なのめく、しづきまひてうさのごとく、弐貳の遺とも
かしこせり、安世醫師なれど、家富く田畑多く
たくさへく有れば、第もてがたなるものゝ、みぎそてくで
世をるーける、富人かのが愚かなるところで、梅九が学ざん
の、すくゝゆくと、ねつこさ、ひくゝ、考よりぬ、ちりくごいひ
あ、そちりあざけりる、一日あせ妻とはすちる、
語りるハ、場ある、人ハ、性強くむざんなれば、物の利
ず、立づるよりうしび、梅九ハ、老智あまり、藝能もすぐ
れたるとをもうとをもすめよあをて、婿よせをやとちふ

ばかりにて、彼田樂のるにてあるを、人よりもいた
さん事、ふびとといへど、妻うちきくうりつ
をもの、ねてより、さうそんづきそゆへ、たとひうつき家
乃子なりとも、愚なるものを、何よりちゅうん年のほども、
娘とハ、あをちゝゆへ、ものゝを婿として、家をとと
後りのへうしといらしをいにもそんあをておちさ
ば、ちゝ娘あも、後りあへ、ほどよりて、
梅九あもものさらしべーなど、夫婦ひそやうかゝひ
ものとをつねんど、常人、孱風のうちつよ、ちゝふしい事と
少つけ、ふよりハ、梅九こと、我ものよいうとだ
うこれなれ、いでさるべきことぞもまへく、彼を失なぞや、

藤原保輔
強盗となり
民間の男女を
責ひろう
同類と共ハ
なのしみを
なす所

とぞおりひつきける。長月の末つかた庭の梢をくゝ
紅葉をそ[illegible]ぬるゝ。綿をそ[illegible]ぬるゝ。安世興よろこ
ばんゝ。宴席をもうけ。美つくり
るくゝみる。才子ある中にも。才子あるをバ。ほいなく擯顧
とゝせて。おのゝ〳〵ゝ[illegible]ゝ。梅丸常人も。共ゝ帯
にをりるゝ。梅丸ゝ絶句の詩を警策
ほめのゝ。常人ハ例乃口おりゝ。一句をゝ[illegible]ち出
かゝるゝ。退をそ[illegible]ておりてたゝうてゝ。酒たけなを
ゝ[illegible]び。人ゝ醉くハをりて。やゝ[illegible]ぬ。
常人すゝ出ゝ。ひるハ梅丸ゝ。其歌をそ[illegible]
かゝ[illegible]ゝ。たゝべきをゝ[illegible]ゝる田家

乃ひとゝて。所望よゝ。品玉輪鼓ハ玉のゝ[illegible]。何よまれ物
ゝ。ゝ[illegible]ゝ。そゝのゝ[illegible]ハ。
彼ゝ[illegible]ゝ。種姓をゝ[illegible]。[illegible]
[illegible]。安世ハ[illegible]ゝ。ゝ[illegible]
おりひとゝ。梅丸ハ[illegible]。
客人[illegible]ハ[illegible]。
ゝひてゝ[illegible]ゝ。[illegible]
安世やゝ[illegible]ゝ。[illegible]
何よまれ。無[illegible]。雅俗をいとび。
き調ゝ。[illegible]。梅丸[illegible]。常人
ゝ[illegible]。何事[illegible]。

坂上樹丸師ある
妻世がも
とにも
青海波
を弟子不

たる姿にて出きたるを例のくせもの博士どもよ
りたちまちどんてうてまつりてひめるほど
なく楽屋にて物のきるとも吹きたてたるに
ぐちりくる紅葉のあるに梅丸のごとく装束し
あちて青海波をとり舞ひ出でたる
世のくるあぶくび桂殿近初歳桐樹媚早手とう
ち舞ひたる者ども清くすきていうとしていつもあ
かりり入おやのほどかるきるとぶてて舞うあでし
さ女くるくるる組あるくて感じあり入りいうでぬく
近ア練じ賀ひとりるよし安世更婦ハちるり
ものとあるやちらども限り静うちあげてほやぶハ

なく舞けてく常の服ふさくてぬくび極ふのぼり来るを
男くら扇ひくさてあるでくてくはもる梅丸初くひてかこ
ほれて安世声ちちつげてあれ赤首有の興なりり義能
としひ始者としひ迎のぶれだりいつぶくぶくぶ
神ふ始ありゆゆく始ぶ迎ふまるくせんうひひぬくもんや
いうあとりくで梅丸あるりふ組なるるるあていくすぐさ須と
おず縫をつさてかくまりちる神あくらいでやかくぶれ
はうくひふくて梅丸ぬくとくく領承ちくとすくもれば梅丸
かくらをあげてやくぶ乃佐めぐくさくひとかくならず
くい穀ひまぐさ初をなく養くいを出ら女をさく
治くくんと男ふとりてかくけなく育ぐくれてこう

て、春をいくそもとせまでいくとせとなれど、安世夫婦
鉢をかたぶけて、春を待て吉日をえらび、婚姻の礼をと
るのべし。但定まれるおきてなれば、かくばかり聘礼のそ
しをとれせまくといへど、梅丸志げ子、業ゆゑ、姉とこの
より縁にくつてたる天だられ相ちあり。藤ふすゐ
て安世が為めにくちるを、此一男は父あていをの
命令乃時、とり出て毎、おのれう與へて、彼りに此
一男を釣りてみなり。こぶまひくさてそだてば
命にしたがんとぎりは、寵やしく毎、永を弱つとかれ
とをめしらひさ、おのれ貴寵なるゆゑ、志せ
さまふがごやくあるまてど、相もひとすず、此

一品は亡父がおくさまあて、いまだ封をぶて、解ひつる物なるゆ、
よろりては大切の寶にて、此一品聘物乃志ゆ
奉るあり、とてうやくしく述りしだ、安世ようちちげ
て、此品いうある物とは、ねども、當世の聘物とて、南辺の
所よりは、こうすきく寶にてあれば、むすめが生涯乃
守りともなすべしとて、とりをさめて、人ごまはひかる
ゆこぶき事文も有べ、各もとひいつそ、
物ゆ絡ちびの酒を色してさぐとて、ちくぶ
けいて、菊もすぐ、酒の
ぶあり、常人はあり、とたびして、祝ひ、
中くに、かれがさいをひるあり、ぬるよとて、すゑ

物まなびにいそしみつゝも女なりしかバならぬ罵詈ありて。
おのが曹司へ入てぞ有しけるさるにても。梅丸がいふぞうるさき悪人めや
見せてんと。寝もやらで有ましと思ひなやましける。あやしめ
きかるをおろかしうりえし。安世が家のとゞり。内外のさうひ。
厳にて。娘蘭生がすめる所ハおくまりたる所なれバ。弟子など
りふ者にも出あひする事なかりしされど女がたのつき
つゝ。物語するにも。梅丸が姿すぐれて学さへの道にもかし
こきえしかバ。蘭生もさる人ときゝてしのびくにおもひ
をいかでてん見なやの心ありけるよしの。舞楽の物の音あり。
たどりされてめのつゞ一人つれて何事なりんと庭づさ
ひ。垣間見て。かいまみけるに。紅葉のこのまぎらしく斎見

ほのげにみやびて見る群がりて。たそがれの舞楽
ありさまみるもの珍しおぼえて。ぞゞろにひきこらちあながら。
袴ごしそつるまでみどりて部屋ま出りて思ひけるハかもしは。
何人ならん。一定伶人の子にておぼゆれんかゝちのやんごとなく
みえぬるハ。その殿の人にハおはせど。おなし女ながら言ん
すいかゝる人をうちみて。深ふかしありて世までさらバおもふつかあら
じとやすらひちまくとおもひぞゝれつゝよりかしてめぐる
に。さらし前て女ながら。そうときたらく。御前にすゝみて五らん
まゝめぐりしていとふ梅丸のうれし乃。青海波舞あつかへぞけさ
すれんものにて。ゆひし。詠など有つるまうても見まほし
ばかり。なつかしくおぼゆくしうひし。物語の文にかゝりしてく

文ばのくれに君ぞちかどい物の数よもいたづらにほのかに
ものを語りさていとよひの事人ハきて居びとり梅丸のぬ
しかやうなる女ばらがはくちにわかものをぞかたり
なるとしてちくど猶つまかしばらくありて所のるにかのとの
三条ていくれが出来くあるうの何ごとをかのたまへどいひ
たくて蘭生にむかひて先ゝ此ものの
父君のゆるさせかくことひ梅丸の君をはんもこがねと定
おきてさせひとるとうちくにゆるへもあるせよと母ハの
仰せくれといつふ女どもうちたちたてまつることいと
きれさいたひおらしるれあるかどくとにいひて。
喧
こゝろちつゞ蘭生もいりかうまいてハ
何とういをかんたゞはおほひてうちあくはをさし
煙
うる女どもおしへうりておまへもちくこのうれとおは
すんちやはうのほどにうちけりてゝくまりうるなど
ちやはあひちく秘かけぬれば搭まあるうてくるく
あ迎て臥所ハ入て我いねるさて何しうにかりて母
蓋生ハ部屋ハ来りて志うくのうを語りきうせ梅丸ハ
贈りうる聘物を出して終所をさあ通て大事にせよと
ぞいひをくうる蘭生此代袋物ハうけ元ゝ日ハ多くを人
おりる錦のさいでゝり出て繕くけ袋物をかへ人の掌人へ
ひきゆひてを秘かを通る扱まくねぢけ人の掌人へ
ちまゝ遇ひゞくていで梅丸ぬしぎぬきせ人と通

けれ。これより一年ばかりさきに老人蘭生がもとへ来り
たるが、むく/\つけ女ひとりかゝらひて、艶書を梅の枝につけて
おくりつかはしける。蘭生もとよりうちゑみつゝよみておさめ
ありし事におもひて、やがて艶書をそのまゝ返しつかはしは
さて梅にむすびつけてやりける。
なりし頃まで、それともしらで、梅がえのなすところありしも
みづからひきわかれん。されてしかとぞ書ける。常人こちかきん
さりも此者のこゝろざしのほどんやそれかこるよりさは我をいとふ
まことにて、甚後にはえそいでも世ぶりける。此法ぎことおもひ
はなれぬしんじ。すべきやうこそあれとて、文せのむすびつけ
女がてゆかりし、蘭生が閨に秘めある梅丸が聘物とておくり

たる袋物ぬすみくれよといひければ、此女おとづれのよて
やすくこそうけあひて、蘭生が湯ひきせるひまをうかゞひて
かの一品をぬすみ出てかへらんとおもひければ、ひそかに常人に
わたしける。常人よろこびて中をひらきみれば、紐の
結びめを紙にかきうつしてひきゆひ、文の内に梅丸が
もとに行て云けるは、此辺近に蘭生と婚姻あり
あとはなくかなひますとおかく、但ふかく
事のかなしき告まはして、ご縁のありし
夫の道理なれば、聞くひそかに告しゆへその
いみて、伯父なる人、此辺と婿と定めてはやく蘭生
なる不存よらずをるべきみなづくしいて夫婦のかく

らひ親さちのれんみもはうすべ況とうはづれかも語りあひて
さる田楽の家乃妻となりしあうんしとしたのまりに仏なりまれた
くひりとそたとひ父母のせめてのうまふとも我ハ梅丸が
妻としなりじとて昼夜なりたまづてをひしらぬ乃
ほどおのくを呼よせてハ此一品ハ梅丸が方ゟ
とて贈りぶ物みくれんとも受てくおぼゆ
やりたくゆなり是ハ如ようにて濁りてあひねとてゞり出
濁りていさゑ〳〵ゆしらくすかりてゆども事かならずゆへバ
蘭生がいまに此辺ゑまゐすべうし
とて成物ゑおのがちちぶりとさる事ゝ
手にいりて見るとおぼゆ蘭生が筆にて吾妻の梅と

いつまでくこいとひ思つる妻とのべるをおもしたばこ
ていつ〳〵ぶたせざりまるがやたゝりひて云ハ度の婚姻
をいがゝ強てゆるゝ事にてハゆをねど師する人つゝ
にハおもひ乃ゆるとゆへどもしこゑ領承をてゆり志ゝ
さゝゝどゝの本意ゑゝをぢる事余義なれとゝ
ゝ師乃ゝとゝりゆゝ
蘭生がゝ辺をきゝひつるゝ告ひてハ彼いゝ
かゝひぬ〳〵さそハゝゝ存ハ甚ゝ
事のをさゝんずゝやゝをゝ
温柔のゝまれつまゝてゝ
志ゝんゝべゝゝくゝひてん

ひとりにんゝ男ひるハ菌生が吾をとるハ種根のいや
ちたときゝてるをあべし師に此るをとりさハ長ガ乃
のゝかゝ沒菌生ゞさ絶いとまゝんざりとそらゞく
日ちとゞもしりゝ婚姻乃期ちゞきぬべしいうたせどか
らんとゝ海ゞ〻ゞうひめゞ〻しつゝ四五日をゞもしるゞこらよ
かくに吾は所よりていとのゝ面むづゝかりぬべし ひと
海ゞ門ゞをゝちゞ退ゞ〻ゝのやゝとも伺ゝべゝゞゞひ定りて
着ゞ乃衣服ゞもゝ白ゝよつゝ返ゝおこせゝ袋物腰り
さゝ祝ゝかゝれてまゞひゞゞゞ乃日格九ゞあゝざる
まをくゝいひさつぎるれゝゞもさるゝたゝんゝ安世乃
心はゝゞ所〻さゞゝ新をゞにゝゞゝを

聞てゞゞゝれてゞいるゝとゝんゝと夫婦ハたゞわきれは
あきれかゝり菌生ハずゝろゝむねゝゞりて衣ひきゝづき
て臥をり女ゞゝハゝりゝまゝゝ神よゝをゝれやゝるゝひ
けんゝ氏の陰陽師ゞゝこの驗者むゝくゝんゝゞゞひゝ
ゝれゝゝ物よゝあゝりてさつゞ國乃墺まで行る男
どゝ塔りきてゝつゝはゝゝくゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ
ゝつりてゞせんゝゝゝゝ常人ひゝゝゝちほゝゝゝゝゝゝ
ゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乳母をちゝづけてゞゝ菌生ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝやゝゞ問ゝけゞゝる事もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
んゝをゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おつさすらひとなりたるあやまちをけらひあるべき
人やあるらしへ〜ぬ人時しもとりひて食ていひるる
をしうする事ハ見とあいそねび光る腰力うちたるを
出るを車やすし食よ魚やすしかど獨どにやしてひしと
何ごとぞと問ひへどたづねるに答へるをぎきその
外よりやまりうるとをもゆをびと倒ひつてをを臭もあお
めるをびいよ安世うちうかづまてさるにくも此まにををあく
べきあるべくとく物後者おどにいひつけておまねく一所く
さがしりあるせるを菌生ハ其日より枕よかりて臥るこの
絶よやまひて歳て老もあがびに安世丈婦まく見ら
おどろ見くとかくいるうりを養ひく日を過しるとで

○すのまさ川

めくて梅九々安世ゞ家を出く〜志ゞの方に三月おやより出
びをるほどそのゆくも著て言ふ為ぬいつまてかくてあ
ゞをなるべ分ハあひすもるくとと思ひがして父の
志しかし国楽清師の幸ハ国ふすめるあれどかこひて
母乃ををあり城をうくうをやとひて歩をこめてうち城
出く遠ゞをさてそいをゞるハ年ハ
身ふたるばりいつをみる。師ふをもさ為りからゆく
かさ外と為ぬるとおのゞ申くすあをさとたくむあれ隙
なる人乃さをけくたせをうめかこをさのなりあゞ
いつの世ふう丈男よむをひまるべきなどありひつけてあるす

ら春の景色うつくしう見えかすみつゝ柳ゆさるゝこの比春雨
降ゝ蓑笠うちうづれたるゆくゝけぶゝとしいくぶさらこ
いうりみちる面影ふ俳作乃ふ者たゝゆえたうひらの
作らひまとなゝ紀姫なびく蘆かすゝすゝのぬれそぎち
てこひちぶふ指びのおりさげふ見えゆるとあそしなりからゝ
してすのさゝいふ川べめつさるに洲比の面ふそうさま
さらて漁りをとゞめゝうしゆそぜんすべゝおゝ出情しる
るふこなさあるあやゝの歌に人あゝさ声きれて何なら
んとうゝひるふ漁りをとゞめられゝ樣人ゝるゝみな
ちふふちぶはりをりこよひひうちよ水ら蔵ぬべゝさら
であをハらゝ漁るべれバそふも爰ふ者りぬゝ人のいふ

つきてけうゝたとして彼家よ入て見あゝひゝく一間よ入て見た
旅人ら二十人あゝり所ゝにおゝりぬうり梅九會尺ちてかゝは
躓りあるふはゝゝゝけうゝけうふとゞかゝゝきて葉硯なゝ
とり出ゝ道をゝゝ詠しつる詩書ゝ思ひ出ゝ筆す
ちゝまちつゝゝりる道あそりゝある火うち袋を勝ち
あゝりに元ちゝ置るをかゝよ碁うちあゝる彩人乃
有りれがはりゝゝゝきて梅九が火うち袋をとりけて
眼を大ゝかゝて云るハこのひうちなハふゝ一道ゝて我りうつる
物なりハりでそのかゝうに置るゝゝうひゝかゝうゝ
えゝくハよりゝあやゝゝりけゝゝきて
れゝちてハやう盜てかゝうるゝゝしいたゝ

梅花すのまく
月よ宿りく
旅人よぬる
びとそらし
いひけら
きらく
とる所

見せんずといきまき居ざけ高く成てい〻梅九うち驚き
うろたえ〻ひく〻論じいへべきにあらねどいかりひめぐ〻しく
面をやら〻げて云けるハさて此辺の物ものそこなひぬる
おのれも又道にて求てゆくべきぞと心えてかくて置て
なり内よりえ立まひしハいかなる物にくいかなくバ銀一両
を紙につゝみて入置つにはかしこそ〻んやとみる〻
はやらう梅九ふと立ち〻ぬ取出さ〻ひろげて
銀をうけ出く紙よりあり考てかとぞ思ふ重く出疑を蒙り
ゆくゆくえ〻うんやくもゆゑび此銀とり納わすひて出いるを
とゝめまつるもんといへどもふたとりをもつよ納りて猶うちみる
みく嘆かしもわるびバかのれさてゆくべきハ法ぞ

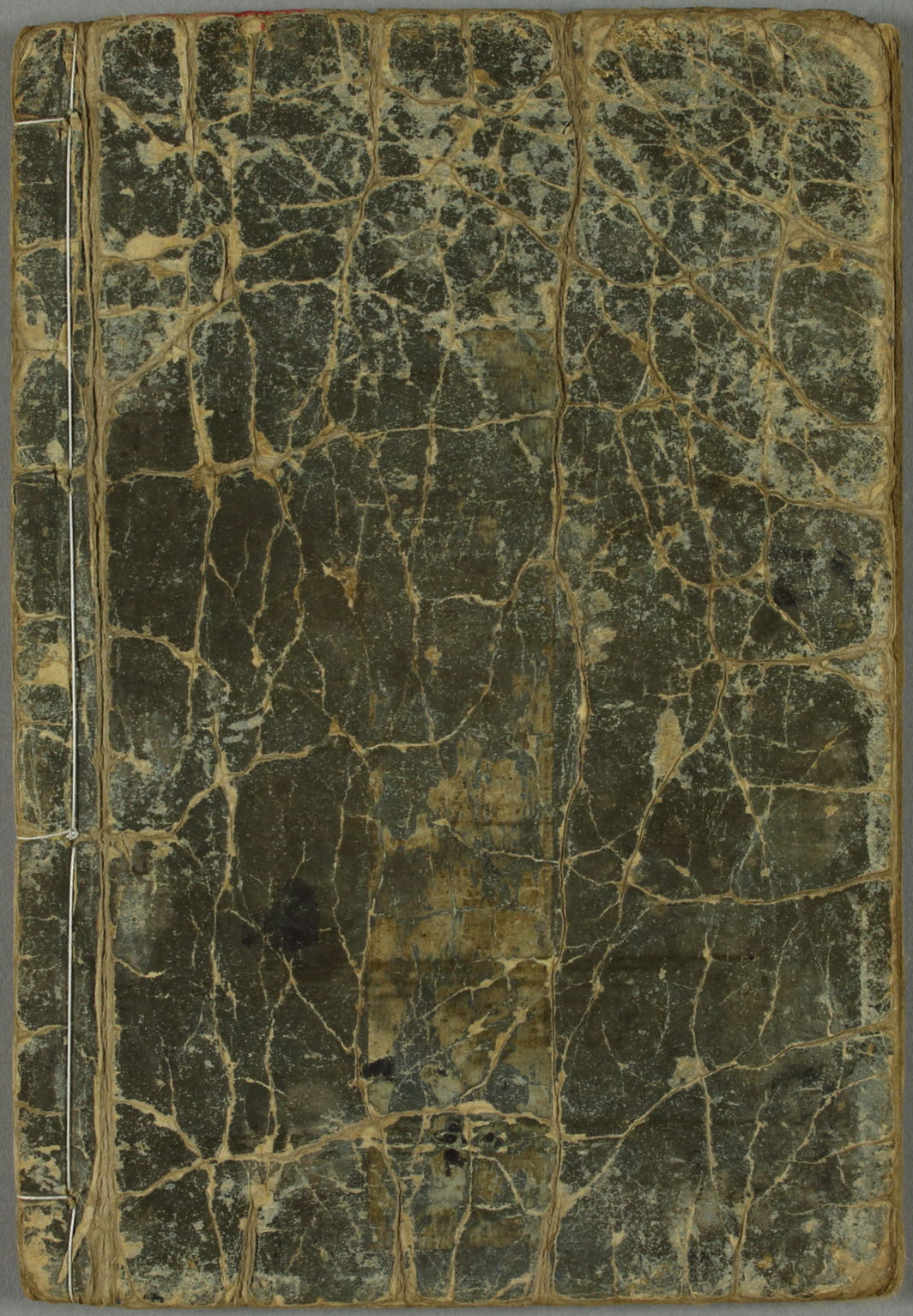
かーはいよ盗人のをびおりて物奪やときくおれもその同類
にそといへをびへ〻おかしーやぶ決為ぐくすり町〻ばかりの
おく〻鳴やらぬ梅九ハ〻そ〻の人乃ありをん所もちゆ
かーしくて面あらくなりて殆ち向ひ居ぬ有てかの
男ぶ〻びを暮〻なんとて盤ーむりひるよ石ひしる筋乃
ふと取て〻ぐもけるる中〻り火うち袋やうとあぶるく
出ぬむりひるる男とく手に乳て是ハそこ〻ぐーちひるつる
物ありひやとい〻バ取く〻ひるま是〻よ中に銀あり〻おのが
おぼへある反古乃紙にて包てあれバまぶふかさやしそハ
ちれよ旅人をぶびてゆくべーつる体ハあらぬ物なり
ろうと嘲むきくれて〻ていふ人〻ふくりてなーつて

人をうさがしてぬひ人をしひうしなひ今ちうひうた役
ものもいふべきかたなし不便なる事なりおとりてかのをとこ
おのれ〳〵梅九が傷ありもひ来てさるは男ひさぐてあるぬ
事ハ汝申かけてゆひきおのが火ひわ代袋のさく似てゆへ〳〵し
ふしきなることを中〳〵今うーなひつ梅ハ見つけ出て
少〳〵殺りは不ハ返しまあるもちうもてもうてき雑言
申て少とかいそうくのべ申べき詞もなくゆあをしれとくま
ゆるさせのえなんしおめ〳〵とうをかうるうるいとや
人をちーてぬすびとこ悪名をつけてのそりーとあを
もくゆるもべきなるびとそのうにハかやつがけうまちゆがむ
ばりうちうてきて意狀かせそうちのうへなじ口ぐは

いくを梅九耳にもいれでうちあみてかの男に向ひてさて
それがーを盗人こしおぼされしはるがひハきとりひねるや
らなこべーくこそ存りへさるは奉りつる火うち袋返しのくこと
うまあくこそ存りへさかくのうまひー事ハやうだちのうるはき
てハちもあるべき道理しなりへだひがとくハ彩うびは殺るか
初んがうにおほせのつてけるうく仁うーく右さてふして
くべかの男ハうこびておとの呼よ追きるこ花人ハ梅九
がかくを見やりて膳こうもるき男うれひひすーや
わがかくうよつきぞうひいりー家あるーくうにうしし
ぎを守てかーらくれつ紫ードのうるるが梅九が花便ぶ
詞てーこをさありそれしばらくめてややく息をつきけか

かくに年の比六十余なる人京家の武士と見えて供人
あまたつれたる姫絵を少のぶくと立て梅九郎
参りてさて〳〵感ず入る比ん底よりわらくおもひ人
乃かたりけんをのどうにをさあるつゝしのつねの人とハ思ひ
ゑらんずりつゝ乃直不疑が故事にもをさく相とるまで
くおぼてくいるる人にくいづく〳〵物一ぱい旅平おもひる
ずいろ〳〵ずハ物語ちゆうとゝ梅九郎のれ近江国平
和ひさちゆうゝ親族もなくゆゝハ今より遠江国ゑ入りるめ
ちるべりハかゝ一ことをさて子ゝ相とりゆまりとゝ
にくゝるべなくたゞひろゝまとゝおのれかくとゝ一ケ月まで
子とゝゝをのやゝて世中たのゝかく過ゆゝ行ま

遠江国ゝる人もさまでゝ見ゝ比ゆうゝ知ゝハいゝよそんゝ
ゝ一ゝるゝひて都にのぼりまえゝん乃めく限りおつ
かひ物一奉ゝんとねんごろよりゝた梅九郎ゝ比ゝ
ゝたのひべきゝもたゝゝ此人のかくあつくゝ
かゝる人よゝきゝそひて都ゝやのぼりゝ思ひてゝ
きていひるハのさまゝゝいづくゝゝきゝ一族と
ちゝゝゝねだゝゆゝを蒙りゝゝ供つまりてんとゝ
うの武士大きにゝゝこびさて我ほいゝゝひてゝ
ゝそゝ此ゝびハ恐びゝたのゝの比社ゝまゝてんゝゝ
にくゝそこゝもかのゝ社ゝゝもゝくまでゝひてゝちゝりゝ
都にのぼりゝゝべゝゝとゝおのか旅ゝ方に伴ひ行て酒ゝど

のまぜ、そとひるく物語ちて今ハひさすゝおのれをものゝ
おぼつかなきやうにハゝ世ゝなどいふよりたのもしく多
涙ぼろ〳〵とこぼれぬ物のついでゝ従者多るゝのゝ向ひく
とのハいかゝ方みるとこゝ嵯峨野ゝ家つくりて住ゝ
むしハいかゝしき武士ゝおもひ出しゝ今ハ世のまゝ
ものつゝ、ものづゝよかゝれ住まゝ世ゝハ嵯峨の左衛門殿と申ゝ
てまろゝといふ梅花ゝ殿ゝ
おもせゝたのもしくゝ
ぼろ〳〵とぞ涙ぼろ〳〵ぞ

近江縣物語巻之一終